

# 日本の数学に未来はあるか

日本の大学の制度の変更が進んできているが、この変更は日本の大学のシステムを米国のそれに置き換えることに尽きているように思われる。米国の大学に長く籍をおいてきたもの(私)にとっては、慣れ親しんだシステムになるだけである。そしてこの変更は、選択の許されない形で前もって決められていたに違いないと思われる。これは大学人の自由意志によるものではなかった。米国の大学のシステムは非常に優れておりこの変更は必ずしも悪いことではない。しかし本当の意味での米国の大学の良いところは取り入れられるのであろうか。

アメリカの大学での日々を振り返って感じることは、いろいろの面でのきびしさであった。日本と違い、一度職を貰えばまず安泰という生活ではない、tenure(永久職の権利)を貰うまでの、何段階にもわたる教育研究に関しての評価がある。Assistant Professorとして採用されても、生き残れるのは半分に満たない、この厳しいシステムを自分自身よく頑張ったと思うし、将来人生を振り返ってそのことに誇りを感じることもあるかもしれない。しかしそのきびしい評価の反面、その評価を公正に行おうとする誠実さには頭が下がった。(公正さは客観性とは異なる。公正な評価には、個人が良心に従いかつ責任を持つ覚悟を必要とするが、日本ではまだその覚悟が育っていない。) それに加えて、その公正さを支えている、学問への信頼、学問の自由への自覚、学問に対するプロフェッショナリズムにも深く感じるものがあつた。

日本人(私)にとっての日本での生活は心地良い。しかし公正さという点において問題は多い。年齢、性別による差別は日本ではあまりにもあたりまえに行われていて通常差別の存在すら気づかれていない。(たとえば公募での年齢制限はアメリカでは法律違反ですらある。) 教育、研究の場でも、生徒、学生、院生、研究者は人間としての尊厳をもって取り扱われているだろうか。個人を枠にばかり当てはめて、各個人の最大限の能力の発揮を期待しないことは公正でない。たとえば最近の数学科入学生のレベルが低下していることはある程度事実かもしれないが、だからといって一律に講義内容を減らすことは公正であろうか。種々の不公正さが、本来であれば数学好きになるべき人達を数学嫌いに追いやってしまっていることもあるように思われる。

日本人は金持ちになり、逆にお金に囚われてしまった。大学改革も目先の利益に飛びついたからのように思える。数学の研究も、どうしてもそれを研究したいという個人の内側からの欲求にもとづいたものから、研究費(科研費)を貰うがためのものに変貌しつつあるようにも思える。(日本数学会の「数学通信」にまで申請書の書き方が載る有様である。) アメリカでは数学の研究費援助における軍関係の資金が国立科学財団の資金(日本の科研費にあたる)に匹敵している。アメリカの数学者達もこのことにジレンマを感じている。もし日本でもそうなったとき、各研究者はどう対処するのであろうか。枠にはめて考えるのはまさに不公正(差別)そのものではあるが、多くの研究者が、特に思想的、哲学的、政治的に無菌培養されている若い世代の研究者が、悩まずに喜々として飛びついてしまうのではと感じてしまうのである。

では日本の数学に未来は無いのか、必ずしもそうではないと思うし、実は個人的にはそうでないかと楽観している。しかしシステムのみが変わっても、学問への信頼、学問の自由の自覚、学問をすることの責任への自覚が伴わなければ、日本の数学、科学、大学だけでなく、日本自体にも未来は無いかもしれない。